

小原克博



何かしら未完の課題を我々に突きつけるのであろう。

平和の希求は人類にとつて、確かに未完の課題である。八月下旬、世界宗教者平和会議の第八回世界大会が京都で開催された。百力国以上から八百人も宗教指導者が集まったという。私も多くの部分に参加し、世界の宗教指導者が平和実現のために尽力しようとする姿勢には大いに

は、戦争はいうまでもなく、あらゆる暴力を拒否する平和主義者としての側面だ。メディアが伝えるところによれば、事件の犠牲者の一人、最年長の

十月初旬、米ペンシルベニア州の学校で起こった銃乱射事件とその後の様子は、世界中のメディアによって報道された。米国では銃による事件そのものは決して珍しくない。この事件がひときわ注目を集めることになったのは、事件の痛ましさだけでなく、それがアーミッシュの学校で起こったことによる。

アーミッシュは、米国とカナダのオンタリオ州だけに居住する少数派のキリスト教徒であるが、自給自足の生活を営み、電気や近代的な機械などを使わない。便利さが人々を悪へと誘い、生活を退廃させると考えるからである。そして、かれらの存在を際立たせているもう一つの点

## 安価な平和と高価な平和

十三歳の少女は「私から撃つてくだ

さい」と進み出たという。この行為の意味をここで論じることができない。しかし少女の心と体が、平和の希求と迫り来る暴力との激しいせめぎ合いの場となったことは想像に

難くない。だからこそ、少女の死が平和活動に関わっている者こそ真の

信仰者であり、自爆攻撃をするよう

励まされた。しかし同時に、会議全体を通じて繰り返された「平和のための宗教」すべての宗教は平和への道であるというフレーズには、不謹慎にも居心地の悪さを感じた。なぜだろうか。平和活動に関わっている者こそ真の信仰者であり、自爆攻撃をするよう

宮村 長



な連中は信仰者の名に値しない、という暗黙の峻別がそこではなされていた。端的に言うなら、平和と暴力の二分法のもと、平和を自らの専有物とし、暴力を外物化してしまふ、そのような端正な整理の仕方に違和感を覚えたのだと思う。

九月にローマ法王ベネディクト十六世がドイツで行った講義が、世界中のイスラム教徒から強い批判を受けた。ムハンマドが新たにもたらしたものは、邪悪で冷酷なものだけだ」という十四世紀のビザンチン皇帝の言葉が引用されたことが原因とされているが、講義のテーマは信仰と理性の関係についてであった。ただ、西欧キリスト教世界こそが理性の継承者であるとの主張は明確であった。もしその講義で西欧世界にも十字軍に代表されるような暴力の系譜があり、また、イスラム世界にも理性と信仰の探求の歴史があることを正しく語っていれば、先の引用は大きな問題とはならなかっただろう。ここにも理性を自らの専有物とし、暴力を外物化しようとする二分法がある。暴力性と平和を一身に受けとめようとした、あのアーミッシュの少女の死が、平和について流麗に語る世界の代表的な宗教指導者以上に、平和の得難さを私に深く考えさせたのは偶然ではない。

(同志社大教授・キリスト教思想)